

#03.放課後布団に潜り込んできた幼馴染のだらだら密着ご奉仕♪

//あなたの家・あなたの部屋

「ん〜…来たよ〜」

「ん？ 寝てるの〜？」

「まだ早いじゃん、こんな時間に寝たら、夜眠れなくなるよ〜」

「ん〜…起きる気なしか…疲れてるの〜？」

「ま、いっか…こっちの方がやりやすそうだし？」

「んっしょっと〜。お邪魔します〜」

「いや、なんか起きる気なさそうだったから、私の方から近づこうかなって」

「別にいいでしょ〜。

昔はよく同じ布団で一緒にお昼寝してたりしてたんだからさ〜」

「って、かなーり前だけどね…ふふっ」

「それにしても…すんすん、すんすんすん…」

「今日ちょっと汗臭くない？ 私の気のせい？」

「体育はあったけど…ん～そのせい？」

「すんすん…すんすん…男子の匂い…がこうなの～？」

「ん、まあいいや…んふ～」

「別に嫌いじゃないし。あんたの匂い。」

「私は大丈夫でしょ？」

「ちゃんと来る前にシャワー浴びてきたからね。ふふんっ。」

「え、いや～だって、流石に汗の匂いは嗅がれたくないし…」

「…準備、しとかないとだったし？」

「ん～こっちの話～」

「…ほら、アレだよ」

「この前…その…エッチなこと…手伝ってくれたじゃん？」

「けっこ一気持ちよくしてもらったしさ…感謝してるっていうか…」

「だから…その～なんというか…」

「お礼？ 的な…感じで…」

「今度は、私があんたを気持ち良くしてあげようって思って…」

「色々勉強してきたんだよ？ 男子が喜びそうなこと～」

「まあ、あんたはそのままにしていればいいから…」

「とりあえず、おちんちんだけ、借りるよ～」

「んんっ…やっぱり汗臭い気がする～」

「こことか、特にさ～。くんくん…くんくん…んんっ…」

「むわ～って臭ってくるわ、むわ～って…」

「んん…まあ、嫌な感じとかは、あんましないけどね～」

「あんたのなら、まあ…そんな緊張するもんでもないし？」

「…ん、じゃあさっさとはじめよ」

「まずは手で気持ちよくしてしんぜよー」

「なので、涎…垂らせてもらうから」

「ん…れるう…」

「ん～こんなもんかな～？」

「んじゃあ、やってくよ～？」

「ふう、ふう…ふう…ふう…」

「どう？ カ加減とか…悪くない？」

「こうやって触るの…初めてだから、何かあったら言ってね～」

「ん～ふう、ふう…ふう…」

「ん～、それにしても…これがこの前私の中に入ったんだよね？」

「結構でっかいし、固いし…全然想像つかないわ～」

「ん～初めてをもらってくれた、おちんちん…」

「この前の感謝も込めて、シコシコしてあげないとだね～」

「ん…っしゅ、よし、よし…シコシコ…」

「ふう、ふう…なんか私の涎じゃないのも、混じり始めたかも？」

「これがあれだよな…我慢汁ってやつ？」

「気持ちよくなると出てくるやつでしょ？」

「ま～これくらいは知ってるよ。勉強したし？」

「じゃあ、手を使うのはそろそろ終わりにして～」

「次は口を使って～気持ちよくしてしんぜよ～」

「んっ…ちゅっ…」

「んっ…ちゅっ、ちゅぶっ…ちゅっ…ちゅう…」

「ふう～どーう？ 変じゃない…かな？」

「おちんちんの反応は良さそうだけど…たぶん、大丈夫だよ…ね？」

「ふふ…それじゃあ、この調子で…」

「んちゅっ、ちゅっ…ちゅうっ…むちゅっ…ちゅうっ…ふう、ふう…んふう…」

「ん～…なんか舐めやすそうだから舐めちゃった～」

「んっ、れる…れるれる、れろちゅっ。

んっふっ…ちゅう、れるれる…れろろお～」

「んちゅっ、ちゅう…れるれる、れろちゅっ…ちゅぷっ…」

「ふう、ふう…れるれる、んっ…んんっ、んふう…」

「どう？ もしかして、くすぐったい？」

「それとも～気持ちいい？」

「ビクビクってしてるから、そのどっちかな～って思ってさ～」

「まあ、顔見れば答えわかつちゃったけど～」

「んふっ、ふう…そんな顔されたらさ～…

もっとサービスしてあげたくなっちゃうよね～」

「ふう、ふう…ん、だから～今度はこれもつかって～気持ちよくしてしんぜよ～」

「ふう…」

「これだよこれこれ～」

「男子が好きな～む～ね」

「これで包んでパフパフすると、気持ちいいんだってさー知ってた？」

「まさか胸をそういう風に使うなんてね～びっくりしたけど…」

「パイズリって言うんでしょ？ 試してみようかなって思ってさ～」

「は～い、それじゃあパフパフしてあげる～」

「んふう、ふう…」

「ふう、ふう…はあ、ふう…んふっ…ふう、ふう…」

「包み方は…こんな感じ？ もっと動かした方がいい？」

「ふう、ふう…ていうか、胸の間…大丈夫？ 変な感じ…しない？ (はふう…)」

「その…あんたのおちんちん気持ちよくしてたら…汗かいちゃって…」

「蒸れてるっていうか…んふう、そんな感じ…」

「んん…でも、まあ…ふう…そんなに悪くないのかな？」

「おちん…ちん、大きくなった気がしたし～？」

「ふう、ふう…やっぱ男子っておっぱい…好きだよね～」

「私からしたら、重いだけなんだけど～…ふう、ふう…」

「まあ、こういう風に使えるなら～いいのかな～？」

「んふう、ふう、んっ、ふう…ふう…んんっ…はあ、ふう…」

「私の涎と汗と～…んふう、あんたのお汁で、ドロドロになっちゃってる♡」

「はふう、んふっ、ふう、ふう…はあ、はあ…ふう、んんっ…

パフパフ…パフパフ…なんちて」

「んむう…ふっ、ふっ♡ はあ、ふう…」

「ん～…これ、意外と疲れるね…」

「あんたは寝てるだけだけど？ こっちは手、動かしてるからさ～」

「まあ、今日はお礼だからいーんだけど～…そろそろ違うことしようかな～」

「よいしょっと…」

「んんっ…おちん…ちん、あつつう…

ふふ～…やっぱ最後はおまんこでしょ？ 気持ちよくしてしんぜよ～」

「いーでしょ？ 私も気持ちよくなりたいしさ～」

「うりうり～んふっ！ なんて…んんっ…」

「絶対こっちの方が気持ちいいし？ 多分…」

「だからさ…いれちゃうから…ね？」

「じゃ、ゴム…着けちゃうから」

「ふう…っと…うん、前よりもうまく着けられた気がする～」

「きつかったり、しないよね？」

「せっかく出してもらうのに、もったいないけど…

流石に生は…危ないから、ね？」

「じゃ、このままの体勢で、挿れちゃうから～」

「ふう…ふう…んんっ♡ あっ！ ふっ！」

「んっ…んんんんんうううっ！」

「ふう、ふう…はあ、ふう…んっ…」

「ご、ごめん…気持ち良くて…んんっ♡」

「この体勢だと…前よりも奥に入るっっていうかぁ…」

「これ…好きかも♡」

「ふう、ふう、んっ…じゃ、今日も一緒に気持ちよくなろーね」

「ん…じゃあ、動くよ～？」

「んんっ！ んふっ！ あっ！ あっ…んくっ！ ふうっ！

ふう！ んんっ！」

「あうっ…んんっ！ これ、やっぱり…んっ！ 奥、当たってえ…」

「結構…ていうか…かなり…いい…かもっ…んんっ！

はあ！ あっ！ あんっ！ んふう！」

「あんたは…どう？ やっぱり前とは…違う？ んんっ！ ふっ！ んんっ！」

「でも…気持ちいいのは一緒…なのかな？

んんっ！ ふうっ！ ふっ！ んんっ！」

「おち…んちん…から、そんな、感じが、するっ…のっ！ んっ！」

「んふふっ！ 幼馴染に、馬乗りにされてさっ…んんっ！

パコパコって…されるの…好きなんだね♡」

「なんて…ねっ！ んあっ！ あっ！ はあ！ はあ！」

「まあ、私も…奥に！ おち…んちんがっ！ 当たるたびにい…

んあっ！ あうっ！」

「えへへ…んんっ、気持ち良くなって…声、漏れちゃうんだけど…さ～…

あうっ、んんっ！」

「はあ、はあ…ふうっ…んあっ！ はっ、はあっ！ んあっ！

あっ…はあっ…ああっ…んんっ！」

「やだ…なんか、硬さ変わった？ んんっ！

もっと奥にい…当たって…る、しい…んんっ！」

「ああっ…んっ！ ああ！ はっ！ んあっ！

そこ…そこ、そこ…そこ…んんっ！」

「ふううっ…んんっ！ あああっ！ はあっ！ あっ！ あっ！ あっ！」

「ふう、ふう…んんっ…やば、マジ…声…でちゃっ…んんっ！ はあっ！

あっ！ あうっ！ んふっ！」

「もう…んんっ！ 駄目…！ はあ、あうっ…んんっ！ あっ！

あんたよりも先に…イキそうになるし～…んんっ！ ふふうっ！」

「んんっ！ あっ！ ちょ、ちょっと待ってっ！

そんな押し付けるようにしちゃあっ！」

「イツちゃいそうって…言ったのにい…んんっ！ あっ！

あんっ！ んんっ！」

「はふっ！ んんっ！ ああっ！ あっ！ あっ！ んっ！ あああああ…！」

「はあ、はあ…なんで、私がする…って言ってる…んっ！

でしょお～！ ああっ！ あっ！ んあっ！ んんっ！」

「ふうっ…んんっ！ ああっ！ んっ！ んんんっ！

もう…仕方ない…やつめえ～んんっ！」

「なら…んんっ！ どっちが先にイクか…勝負だよお！ んんっ！」

「んっ！ んっ！ んんんっ！ ふううっ！」

「はっ…ああっ！ んっ…くううっ！ んっ！ んあっ！ んんっ！」

「ふうっ、ふうっ…んっ！ どう…あんたもっ…んんっ！

結構…キツイんじゃない？」

「おち…んちんっ！ 挿れる前からっ…んっ！ あうっ！

たくさん…気持ちよくされてた…わけ…だしっ！」

「もう…すぐに…発射したいんじゃ…ないっ？ んあっ！ あうっ！

んふっ！ ふうっ！ んんっ！」

「ほら～…我慢は良くないぞ～？ んんっ！ 出せ、出せ、出しちゃえっ～！」

「ジुकジुकになった、おまんこにい…んんっ！」

「んんっ！ ほら、ほら、んっ！ グツグツ溜め込んだ…精液…出しちゃえっ！」

「んんっ！ あっ！ はふっ！ ふうっ！ ふうっ！ んんっ！」

「イク、イク…イク～♡ ってえっ！ んんっ！ イッちゃえ～っ♡」

「あうっ…！ んっ！ んっ！ んふうっ！ 出せ…出せ…出せ…だーせっ♡」

「あああっ！ んっ！ あっ！ ああっ！ えひひ…！ 本当に限界じゃん？」

「んんっ！ ちょうどいーねっ！ はあ、んっ！ 私も…もう…限界だし…」

「せーので…イコ？ ね？ ねえ？」

「んんっ！ というわけ…でえっ…3…！」

「にい～いっ！ あううっ！」

「いいいいちっ！ はあ、はんっ！ んふっ！ んっ！ んんっ！」

「せえーのっ…」

「ゼロおおおっ…」

「んっ！ んんんんっ！ ふうううっ…んんんっ！」

「はあ、きたきた…きたあ♡ あんたの…んんんっ！」

「はあ、はあ、はあ…どりゅどりゅってえ…ゴム跳ねてるう…」

「はあ、はあ…はふう…ふふっ…」

「んっ…本当に…一緒に…イケたね…はあ、はあ、ふう…」

「ん…♡ ありがと♡」

「ほんとはあんたへのお礼…だったけど、一緒に気持ちよくしてもらえて…

良かったよ…ふう…」

「ん…じゃあ、また…しようね」